

近世後半における百姓の米の消費量とその地域性

有 蘭 正一郎

- I. はじめに
- II. 近世後半の百姓の食生活に関する諸氏の見解
- III. 支配する側の記録にみる近世後半の百姓の食生活
- IV. 近世中期における百姓の米の消費量の推計
- V. 百姓の記録にみる近世後半の百姓の食生活
- VI. 近代初期の統計からみた百姓の米の消費量とその地域性
- VII. おわりに

I. はじめに

現代の日本人の多くは「近世の百姓は米を作りながら米を食べられなかった」と考えている。それは様々な貢納や規制のもとで、常に搾取され、監視されつつ、暗い日々を重ねていたとされる近世の百姓像から導き出される推測である。この推測は「たてまえ」の世界の歴史を教えたきた学校の歴史教育にもとづいて形成されたと思われるが、はたして的中しているであろうか。

筆者は鹿児島県で生まれ育った。現在の鹿児島県の領域とほぼ重なる薩摩藩領の百姓たちは、近世には他の藩よりも数が多い武士を養うために、過酷な搾取体制のもとで、少ない田から獲れた米はほとんど徴収され、畑から獲れるサツマイモで飢を凌いでいたとされる。そして、百姓たちにかろうじて生存はあっても、人間らしい生活はなかったと云われる。

しかし、幕末から大正時代の後半までを生き、た筆者の曾祖父は、まさに薩摩藩領下の貧しい

百姓であったが、農作業や手間仕事の竹籠作りに励む一方で、常日頃焼酎の入ったトックリを腰にくくりつけて、昼間から田舎の凸凹道を楽しげに徘徊していたと聞く。すなわち、貧しい中でも日々の生活を楽しんでいた曾祖父の生きざまが、筆者には想い浮ぶのである。事実は歴史書や学校教育で摺込まれた「たてまえ」の世界とは異なっていたのではないか。何か指標を使って、近世の百姓の生活の実像を明らかにしてみたいと、筆者は以前から考えていた。

本稿は、そのような問題意識のもとで、現代の日本人が持つ近世の百姓の食生活像の是非を考察してみた結果の報告である。考察の手順は、はじめにそのイメージを造らしめた支配者側の史料を紹介する。次に、農書・農事日誌・家訓などの中から、百姓が「本音」を記述していると筆者が判断した史料を用いて、百姓の食生活、とりわけ米の消費量を明らかにする。さらに、近代初期の農業就業者1人当り米の国別推定消費量と対比して、百姓側の史料の普遍度を検討する。なお時期を近世後半としたのは、データとして得られた史料の多くが近世後半のものだからである。また論文で使う用語としては「百姓」よりも「農民」のほうが適切であろうが、本稿では近世の支配者が農民をさして使った「百姓」を用いることにする。

II. 近世後半の百姓の食生活に関する諸氏の見解

近世後半の百姓の食生活、とりわけ米の消費量に関するこれまでの諸業績を見ると、米はほ

とんど食べられなかったとする説がほとんどである。かつこれらの説が拠りどころにする史料は慶安2年の「触書」であり、百姓側の記録を用いての説ではない。またこれらの説は、「米を食べる」ということを「米だけの飯を食べる」ことだと解釈しているようである。例を4つあげよう。引用文中の（ ）内の文章は筆者の加筆である。

岡崎桂一郎は『日本米食史²⁾』に「当時(1662年頃)に於ける町人百姓は、平素中々玄米すら容易に常食となすを得ざる境遇にありて(中略)殊に農民は何処も主として麦粟稗などの雑穀を用いて米を食ふの日は一年中数ふるに足らぬ程なりしなり。」(前掲1) 236~237頁)と記述している。岡崎が使った史料は『落穂集』などの随筆や地方書の類であった。

永井威三郎は『米の歴史³⁾』に「江戸時代に至っても現実には(米は)国民食とはいえなかった。米を作る農家の大多数は麦その他の雑穀を主食とし、米はほとんど自らの手には残らなかった。一年数回祭礼祝日に米の飯を食べるのが関の山で、それだけに米に対する執着もまた強かった。」(前掲2) 208頁)と記述している。

筑波常治は『米食・肉食の文明⁴⁾』で「(江戸時代の農民たちの)苦心の産物である米は、まったくといってよほど年貢にとられてしまって、農民たちには食べることができなかった。江戸時代の農民にかんするかぎり、かれらは米作人種なのであって、けっして米食人種ではなかったのである。(中略)農民たちの主食は雑穀であった。しかも労働の大半は、年貢のために稲作にかかりきらなければならなかった。」(前掲3) 122頁)と述べている。このような一般向けの概説書は、近世の百姓の食生活に関する現代の日本人のイメージ作りに、決定的な影響を与えているように思われる。

別枝篤彦は「米食の思想⁴⁾」と題する論文の中で、「農民の常食として雑穀を中心とすることを命じた慶安御触書はよくこれ(米を特定階層が徴収して独占すること)を示している。(中略)日本の農民にとっては明治以降も麦飯が普通で

あり、米飯が一般の日常食となったのはようやく第二次世界大戦後であったことを想起しなければならない。」(前掲4) 19頁)と述べている。

これに対し、百姓側の記録を用いた実証研究を見ると、近世の百姓は常日頃から米をある程度食べていたようである。ただし、日常食べていたのは米が入った「かてめし」や粥や雑炊であった。

五十嵐富夫は群馬県山田郡龍舞村の武藤家に伝わる著作年未詳の記録『家例実記』を使って、豪農の食生活を復原している⁵⁾。その結果、米の消費については「米飯は1年間に数回の節日に限られ、平日の食事は粟・割米や麦の入った粥飯が常食であった。」(前掲5) 64頁)と報告している。

西川俊作は1841(天保12)年に編集された『防長風土注進案』を使って、幕末期の長州における穀物の消費量と、庶民の常食の内容を、計量的に考察している⁶⁾。西川によると、1840年代の長州における1人当たり米の可能供給量は0.8石(庶民の可能消費量は0.6石)であり、「長州の人民は米市場を通じて食糧の半分程に当たる米を食べていた」(前掲6) 152頁)状況が明らかにされた。

藤野淑子は1873(明治6)年に完成した『斐太後風土記』を使って明治初年の飛騨国の人々の食生活を復原している⁷⁾。その中で藤野は、飛騨は米の生産量は少ないが、他地域からの移入によって、1人1日当たり285g(年間0.69石)の米が供給されていたとしている。

板倉聖宣は『歴史の見方考え方⁸⁾』に、近世の水田面積と米の生産量と年貢米の流れを考察した結果、「江戸時代の農民だって(穀物の中では)米を一番多く食べていたはずだ。」(前掲8) 56頁)と述べて、その証拠になる事例を当時の記録の中からいくつか挙げている。

『地域経済統計⁹⁾』が引用する1886(明治19)年調べの『農事統計表』には、幕末の1861(文久1)年における常食の全国合計の比率が記載されている。その割合は米47%、麦28%、雑穀19%、甘藷3%、その他3%であった(前掲9)

39頁)。

百姓側の記録を用いたこれら5つの実証研究の成果に従えば、米と雑穀がほぼ半分入った「かてめし」や粥や雑炊を日常食べた百姓像が構築できるのである。

はたして近世後半の百姓は米を食べられたのか、どの程度米を食べられたのか、支配する側と支配される百姓側の両方の記録を使って、次章以下で実証してみたい。

Ⅲ. 支配する側の記録にみる近世後半の百姓の食生活

現代の日本人が近世の百姓の食生活をイメージするのに使う史料は、1649(慶安2)年に幕府が出したとされる「慶安二丑年二月廿六日 諸国鄉村江被仰出¹⁰⁾」、いわゆる慶安2年の「触書」であろう。この中に次の条文が記載されているからである。

一、百姓ハ分別もなく末の考もなきものニ候故 秋ニ成候得ハ米雑穀をむさと妻子にもくハせ候 いつも正月二月三月時分の心をもち 食物を大切ニ可仕候ニ付 雑穀専一ニ候間 麦粟稗菜大根其外何に而も雑穀を作り 米を多く喰つふし候ハぬ様に可仕候 (前掲10) 160頁)

すなわち食糧が乏しい冬季と同じ心構えで、可能なかぎりの「かて」を米に加えた食事をせよと、百姓の食生活を規制している。しかし、「米を多く喰つふし候ハぬ様に可仕候」であって、「米を食べるな」とは書いてない。

近世には慶安2年の「触書」を食生活の規範に置き、その地方版に該当する史料が多く見られる。ここではその例を6つ挙げよう。

伊勢国の歴史書「宗国史¹¹⁾」(18世紀前半、藤堂高文撰)の外篇第八巻「志第一 封疆志附考」には、「筆之次に百姓食物の様子聞たる俣を書記如左」で始まる次のような記述がある。

春夏者一日に一度ツ、麦飯をたへ 其外ハ粉米など一人前ニ苞合ツ、之積リニ入り子団子芋大根茄子小角豆小麦唐黍之団子 或ハ小麦糟引割之類のみ喰候 秋冬と

申内秋は別而骨折 米も手に入故 上納米ニ不成悪米之飯一度ツ、たへ 二度ハ彼ノ団子ニ芋大根菜荒和布之類(前掲11)418頁)

百姓たちが食べた米は、春夏は碎け米、秋冬は年貢に使えない劣等米で、多くの「かて」と混ぜている。ただし、書いた本人が見たことではなく、「聞たる俣」の記述であることに留意しておきたい。

近世中期の地方書「民間省要¹²⁾」(1721、享保6、田中丘隅、東海道川崎宿)の上編巻之四第二九「百姓の奢りを可禁事」には、次のような記述がある。

百姓の食事に至る迄 古へは粟稗麦等を粥にして野菜多入れ 是上代より用ひ来る事百姓の常なりしに いつとなく粟稗はめしにたかれて粥は止みぬ(中略) 田方に生るゝ百姓は雑炊にしても米を食ふ事あれど 山方野方に生れては正月三ケ日といへど 米を口に入るゝ事なき所多し 粟稗麦など食に焼とても 菜蕪干葉芋の葉豆さゝげの葉 其外あらゆる草木の葉を糧として 穀物の色は見へぬばかりにして 而も朝夕あく程の事なく 漸日の中一度宛ならては是を食ふ事なく 餘は前に云ふ粥の類にて日を送る 朝夕の膳などにすはると云ふ事はなく 少も物を食べば蟹の泡のごとく成り茶をいくらかも汲飲んで足れりとす(中略) 此外国々を渡り 衣食住の衰さをいはゞ 誠に涙もとゞめ難し ケ様の事も近年そろそろと変じて 世と共に食事もよくなれり 田方は尚以て分に過てよし(前掲12) 99~101頁)

越後国長岡藩領の武士が1805(文化2)年に書いたといわれる「粒々辛苦録¹³⁾」は、「民間省要」の文章を引用しつつ、この地域の百姓の食生活が次のように衰れた内容であると記述している。

(百姓の)食ハ水と糧とのミ多し 菜蕪大根干葉芋の茎葉大豆小豆さゝげの葉木の葉を糧として 麦粟稗などのぬたにてあい物にして食ふか如し 粒々の姿ハ見へぬ也(前

掲13) 66頁)

六七人の家内なれハ(大根を縦に細かく刻んだ)小切二升位を一鍋の内へ入 稗の粉と蕎麦のめはななどに交合せて 夕飯ニハ其かて飯を食し 其余あれハ明日昼飯にあたゝめ雑炊の下盛にして食す 朝ハ雑炊を食する也 雑炊の拵方ハ 大根を堅横に切り 鍋へ入 其内へぬか味噌入煮立 大根の大概煮たる時分団子を入れる 其団子ハゆりごの粉と麦の粉とを以拵ひ 粍人に五ツの図りニ入るゝと云 まとしく哀れ成もの也(前掲13) 79頁)

伊予国大洲藩領の武士・井口亦八は『農家業状筆録¹⁴⁾』(文化年間、1804~18)の中で、大洲藩領の百姓の食生活を次のように記述している。

年始三日をすきぬれば あさとばんとはちらしとて麦にとうきひをいり 磨にてひき粉にしたるものを 雑炊とて菜大根おしなへての野菜を味噌に煮(前掲14) 231頁)

下々の農家にいたりては 麦あるひハとうきひ一升に もみぬかあるひは麦糠二三升三四升もませ 甚しきハ五六升も交せて食とし 極貧民に至りては七八升もませ食するといえり(前掲14) 233頁)

下野国芳賀郡小貫村の小貫萬右衛門が1808(文化5)年に著作した『農家捷徑抄¹⁵⁾』には、男女2人で4反歩の田畑を經營する場合の収支計画が記載されている。米の消費に関わる部分は、次のとおりである。

男女式人にて作分量

田畑合四反歩

内 田式反歩

内 式畝歩餅

是ハ日月風雨の祭等之分 正月祭日待庚申待等之分なり(前掲15) 32~37頁)

男女2人の世帯では、貢租や生産費の支出で530文の赤字になるので、ウルチ米はすべて持出しになるのだが、上記のようにモチ米は1人当たり1畝分(量にして1斗程度)は食べていた。また、この世帯で働き手がもう2人増えて8反歩の田畑を經營した場合、生産費のうち、共用

できる農具などの費用は支出しなくても済むので、この分を差し引くと、1年にウルチ米5斗6升ほどの余剰が生れる。これを4人で自家消費すれば、1人当たり1斗4升、重量にして21kgになる。これは現在の日本人1人当たり年間消費量の3分の1弱に相当する。

近世末になると、米よりも雑穀を食べるほうが健康によいと主張する人まで現れる。遠江国周智郡森町村の安居院庄七は二宮尊徳の信奉者であるが、彼が19世紀の中頃に著作した『報徳作大益細伝記¹⁶⁾』には、次のような記述がある。

農人ハ骨折業を致し 土氣を受候ニ者 麦飯其外雑穀を沢山ニ食する 以て真之臟を養ひ 肺之臟も整ひ 食物沢山に食ひ 早く雑穀丈腹へる故に 骨折業出来いたし 米飯ニてハ 自然減り方おそき時者 肺真共迫るを以て 骨折候時者 自然病を生する也 兎角美食者 骨折候ニ者 至而わろし(前掲16) 321頁)

以上列举した史料からは、米の生産者でありながら、米をほとんど食べられずに雑穀食を強いられた、当時の支配する側から見ても哀れむべき百姓の食生活しかイメージできない。ましてや飽食の世相に生きる現代の日本人には、これだけでも近世の暗さをイメージするに十分な情報のように思われる。

『農家業状筆録』の解題には、現代日本人が持っている近世の百姓像の典型ともいえる、次のような記述がなされている。

本農書(『農家業状筆録』)においては、彼(井口亦八)が郡奉行を勤めていた天明・寛政期から執筆時の文化期に至る農村の状況が、彼の経験や見聞、学識をふまえて、彼なりの眼で、中級武士としての立場から、描かれているといつてよいであろう(前掲14) 312頁)。

以上、『農家業状筆録』をもとにして、十八世紀後半の農民や農村の状況をまとめてみた。一言でいえば停滞的な生産力、重い貢租負担、貧窮分解によって、農民の世界は、つらく、苦しく、暗い粒々辛苦の世界であった(前掲14) 321

頁)。

しかし、次章以下で米に関する近世中期の数値と、百姓が「本音」を記述した史料を検討することによって、上記の諸史料からイメージされる近世後半の百姓の食生活像は、支配する立場の人が「百姓の食生活はこうあるべきである」「こうであってほしい」と望んだ、虚像であったことが明らかになる。

IV. 近世中期における百姓の米の消費量の推計

1721(享保6)年は近世において耕地面積と人口が揃って分かる最初の年である。1721年の全国の水田面積は約164万町歩、庶民人口は約2,600万人であった¹⁷⁾。これに公家や武士などを加えた総人口を約2,900万人と推定する。以下、百姓が消費可能な米の量を推計してみる。そのための前提を、次のように設定する。

- A) 外国との米の貿易はなく、生産された米はすべて国内で消費された。
- B) 米の生産力は玄米にして1反歩当り1石とする。したがって、米の生産量は1,640万石になる。
- C) 主食に米だけを食べた場合の1人1年間の消費量を1石(重量にして150kg)とする。
- D) 百姓以外の人口を500万人とする¹⁸⁾。人口1人当り1年間の米の消費量を1石としたので、百姓以外の人口が消費する米の総量は500万石になる。
- E) 酒造に使われた米の量は分からないが、いくつかの藩領の例と明治初期の使用量が、米の総量の約15%であるので¹⁹⁾、酒造用に246万石を差し引く。
- F) 種籾に使う量を1反歩当り1斗と見積ると、玄米では0.5斗になる。水田面積は約164万町歩であったから、来年の種籾用に82万石を差し引く。

以上の前提にもとづいて、米の生産量1,640万石から順次差し引いていくと、百姓が食糧として消費できる米の総量は812万石になる。これを百姓の人口2,400万人で割ると、約0.34石(重量にして51kg)が百姓1人当り消費可能な米の量

になる。

筆者のこれまでの経験にもとづいて言えば、米の単位面積当たり収穫量は、計算に使った値よりも実際にはもう少し多かったと考えられるし、種籾に使う量はもう少し少なくて済むので、1721年頃に百姓1人が1年間に食べた米の量は、0.5石(重量にして75kg)ほどになるであろう。これは現代の日本人1人当りの年間消費量とほぼ等しい量である。ただし、多くの副食物が揃う現代とは異なり、近世の食生活は穀物の消費量が多く、その量は1人1年間に1石程度であった。働く百姓はもっと多くの穀物を消費していたので、0.5石の米は、百姓の穀物の年間消費量の半分弱になると思われる。支配する側の統計にもとづいて推計しても、近世中期の百姓はこれだけの量の米を食べることが出来たのである。

日本をひとつの器にしたこの値は、百姓が「本音」を語った史料とどの程度重なるであろうか、また地域ごとの相違はどの程度見られるであろうか。次章でそれを検討してみたい。

V. 百姓の記録にみる近世後半の百姓の食生活

ここでは百姓が「本音」またはそれに近い状況を記録したと筆者が判断した史料を使って、近世後期における百姓の食生活、とりわけ食糧として消費した米の量を検討する。

紀伊国伊都郡学問路村の大畑才蔵は、元禄年間(17世紀末)に『地方の聞書²⁰⁾』という農書を著した。大畑才蔵は支配する者とされる者の狭間にあつた人であり、『地方の聞書』の内容はたてまえと本音が相半ばしている。『地方の聞書』には「百姓渡世積かせき」の中で、日常は黍と大麦を食べ、行事日に米を食べることが記述されているが、これは控えめの記述であるように思われる。

(家族と奉公人10人で1日に)きひ壺升六合 朝夕給申雑水之粉一人一度八勺つゝ
大麦五升 昼給申食麦一人白麦貳合五勺つゝ(中略)正月五節句 盆神事 年中廿六日米給申候まし扶持(前掲20) 34~35頁)
信濃国佐久郡志賀村の神津家は、1739(元文

表1 神津家で日常の食事に供された穀物の年間消費量

	米	挽割麦	黍
正 月	2.7石余	—	0.9石余
2～5月	14.4石余	—	9.6石余
6～8月	—	17.5石余	—
9～10月	7.2石余	—	4.8石余
11～12月	3.6石余	—	2.7石余
合 計	27.9石余	17.5石余	18.0石余

古川貞雄『村の遊び日』50～51頁から作成。

4)年の持高が481石の豪農であり、家族6人のほかに24人の奉公人がいた。この頃に神津家の当主が書いたと思われる『家法規矩覚書²¹⁾』に日常の食事に供された穀物の消費量が記載されている。それを整理したものが表1である。神津家では米と挽割麦と黍の3種類の穀物を食べていた。なお家族と奉公人の食事の内容は分からない。

神津家では30人で日常の食事に27.9石余の米を消費しており、1人当り米の年間消費量は0.9石余、穀物の総消費量中の米の構成比は44%になる。このほか遊び日には米を2.6石余、米粉を3.0石余、餅米を4.8石余、合計10.4石余を消費している。したがって、神津家の1年間の米の消費総量は38.3石余、1人当り米の年間消費量は1.3石(重量にして195kg)ほどで、現代の日本人平均の3倍近くになる。

『家訓全書²²⁾』は、信濃国佐久郡片倉村の豪農である依田惣蔵が、1760(宝暦10)年に書いた家訓である。この中の「飯米覚」に1人当りの食糧の年間消費量の見積りが、次のように記載されている。

一、玄米壹石八斗当位 大麦貳俵 但シ搗麦壹石位と心得へし 味噌大豆壹斗三升当此糍貳升塩五升 塩壹斗当 干菜三十連位 冬春迄かぶ沢山可喰 右男女押からめ 老人年中ノ扶持積り也(前掲22) 319頁)

近世の百姓は五分搗き程度の米を食べていたといわれる。したがって、玄米で1.8石は五分搗きすると、約1.7石になる。依田家では米のほかに麦を約1石食べているので、米の構成比は約

6割になる。この米の量は行事日の米だけの飯と餅米も含むと思われるので、それを差し引くと、日常食べる飯の米の構成比は5割程度、すなわち依田家では米麦半々の飯を日常食べていたと思われる。

安芸国高田郡多治比の丸屋甚七が明和年間(1764～72)に書いた記録『家業考²³⁾』には、奉公人に「はんぱく」すなわち米と麦が半々づつ入った飯を日常食べさせると記述されている。

(正月) 四日より家来ハ常の通りはんぱくに じんだあ汁(前掲23) 144頁)

『農業順次²⁴⁾』は常陸国茨城郡小埜村の大関光弘が1772(明和9)年に著作した農書である。この中に持高20石の百姓の経営見積りがなされている。(前掲24) 83～84頁)

それによると、田が1町3反歩(予想収穫量は粳で26石、玄米で13石)、畑は1町3反歩で、労働力は家族3人と使用人1人の合計4人である。この4人の1年間の食糧は、米が粳で10石ほど(玄米で5石、五分搗にすると4.75石)で、ほかに大麦が8石、稗が3石、粟が1.5石、小麦が0.5石、大豆が0.7～0.8石であった。したがって、労働力1人当たり年間の米の消費量は約1.2石になる。4人のほかに2人の子供が2人で大人1人分の米を消費したとすると、1人当りは0.95石になる。

また米以外の穀物から粳殻を除くと、6.5石になる。米の推定消費量が4.75石なので、消費した穀物の中で米が占める割合は約4割になる。

越中国礪波郡下川崎村の宮永正運が1789(寛政1)年に著作した農書『私家農業談²⁵⁾』の「農食之心得」には、屑米と大唐米を食べると記述されている。

上穀をもって貢税に奉り 税屑米の類あるひハ田の狭間に植し大唐稗震粉 山畠より取あけし麦粟黍蕎麦の類を以 妻子を蔭ミ 奴僕を扶持せしむるか則農人の業也(前掲25) 165頁)

越後国三島郡片貝村の豪農である太刀川喜右衛門が1809(文化6)年に書いた記録『やせかまど²⁶⁾』には「(米つきは)月に貳俵当りに 餅

表2 奉公人に米だけの飯または餅の類を食べさせた日

○ 米飯のみ
● 赤飯のみ
◎ 粥
◇ 餅
◆ 雑煮
□ 米粉餅
? は副食から推測される場合である。

	信濃 津朝	国家	佐久 (近)	久世 郡	志中 郡	村 賀期 晩	安吉	芸川 朝	国家	高 (明)	田 昼	郡 和	多 年	治 間	比	大 山	和 本 朝	山 家 (文)	辺 政 文	乙 6	本 年 晩	村 (晩)
正月 1						○		◆		○						◆		◆			○	
2						○		◆		○								◆			○	
3						○		◆		○								◆			○	
4	◆																					
6																					○?	
7	◎									○						◎						
8																			○?			
11	○							◆														
14	◆					○																
15	◎					○		◎		○						◎		◆				
16						○												○?			●	
20																						
晦	◇																					
2月 1						◇		◆		○												
28																						
3月 2								○														
3	◇					○		○														
17										◇												
4月 4								○														
刈								○														
4								○														
5	●					○		○		○						○						
田								○														
休	□					○																
6																						
7月 1								◇		○												
7								○		○												
14								○?		○												
13								○		○												
14	□					○		○		○												◇
15	□					○		○		○												
16	□					○		○		○												○?
8月 1	□					○		○		○												○?
15						○		○		○												
16						○		○		○												
9月 1						○		○		○												
13																						
15						◇																
28	●																					
麦								○														
10月 9								○														○
10						◇		○		○												○
11																						○?
11																						○?
11																						
11						◎																
12月 1								◇														
7	○							○														
8																						
12	○					□																
13	○					○																
松						○																
迎						○																
年						○																
越						○																
晦						○																○?

●どの食事か不明

◎どの食事か不明

米とも用意せし也」(前掲26) 327頁) という記述がある。

太刀川家の家族人数は不明であるが、奉公人は3人いた。家族を5人とすると、合計8人で米を1人当たり1か月に1.1斗、1年に約1.3石消費していたことになる。

大和国山辺郡乙木村^{おとぎ}の山本喜三郎が1823(文政6)年に書いた記録『山本家百姓一切有近道²⁷⁾』の「飯米入方」の中に、1年間に消費する穀物の量の見積りが記述されている。

一、米貳拾石九斗 餅貳石 𦉰貳拾貳石九斗白麦拾三石(中略) 此外下米あわときひ小麦空豆大豆杯を入候へハ 四十四石も入と相見へ 能心得へし(前掲27) 279頁)

『山本家百姓一切有近道』の解題者は、山本家は家族が3~5人、奉公人10人、合計13~15人と推定している(前掲27) 305頁)。家族と奉公人を合せて15人とした場合、1人当たりの米の年間消費量は、ウルチ米が1.4石、モチ米が0.13石になる。また行事日の米を差し引いた日常の飯の混合率は、米6割、麦4割程度と思われる。

ちなみに、近世後半の百姓は行事日にどの程度の米を食べていたのであろうか。ここでは豪農が奉公人に米だけの飯または餅の類を食べさせた日を拾い、行事日における米食の一端を明らかにしてみたい。

表2は、信濃国佐久郡志賀村神津家の『家法規矩覚書』、安芸国高田郡多治比吉川家(丸屋)の『家業考』、大和国山辺郡乙木村山本家の『山本家百姓一切有近道』の記述の中から、奉公人に米だけの飯または餅の類を食べさせた日を、朝・昼・晩別、献立別に、表示した表である。日数だけを数えると、神津家32日、吉川家33日、山本家22日である。この数の多少の評価は読者にお任せするが、行事日や重労働をおこなう日には、米を腹いっぱい食べさせていたようである。これらの日の消費量まで加えると、百姓の米の消費量はさらに多くなる。

これまで8例をあげたが、『地方の聞書』と『私家農業談』以外の史料から、百姓の1年間の米の消費量は1石(重量にして150kg)以上であっ

たか、そうであったと推測できることが明らかになった。また日常の食事における米と雑穀との構成比は半々前後であることも明らかになった。これらの史料から見るかぎり、近世後半の百姓は1年間に現代の日本人の約2倍の米を食べていたのである。ここに支配する側の史料からイメージされる近世後半の百姓の食生活とは異なる姿を描き出すことができた。ただし、近世の百姓の穀物の消費量は1年間で1石半をやや上回っていたと考えられるので、米だけでは足りず、日常は米と雑穀半々の「かてめし」や粥や雑炊を食べていたことも事実である。

しかし、これら百姓の記録は日本地図の中では点にすぎないし、また記録を残せるほどの教養と余裕を持つ家に限った消費量かも知れない。したがって、これらの史料の記述が該当する地域内で普遍性をもつか否かを計量的に証明する必要があるのだが、近世にはそのようなデータはない。

そこで、次章で近代初期の米の生産量と農作人口を用いて、農業就業者1人当たり1年間に食えることができた米の量を国別に推定し、それと上記の百姓の記録から導き出した値と比較して、筆者が取り上げた諸記録の米の消費量がその地域内で普遍性を持つか否かを検討してみたい。

VI. 近代初期の統計からみた百姓の米の消費量とその地域性

図1は、1884(明治17)年前後の国別の統計を使って算出した、農業就業者1人当たり食えることができた米の推定量とその地域性を示す図である。

素データは『第一・二次農商務統計表²⁸⁾』に記載された1883・84・85(明治16・17・18)年の国別の米の生産量と、1884(明治17)年の人口と農作人口である。「農作人口」とは、『第1・2次農商務統計表』によれば、「専業兼業及ヒ男女老幼ヲ併セ」(前掲28) 19頁) た数である。筆者はこれを年齢および農作業に従事した日数の多少を問わず農業に従事した人口、すなわち農

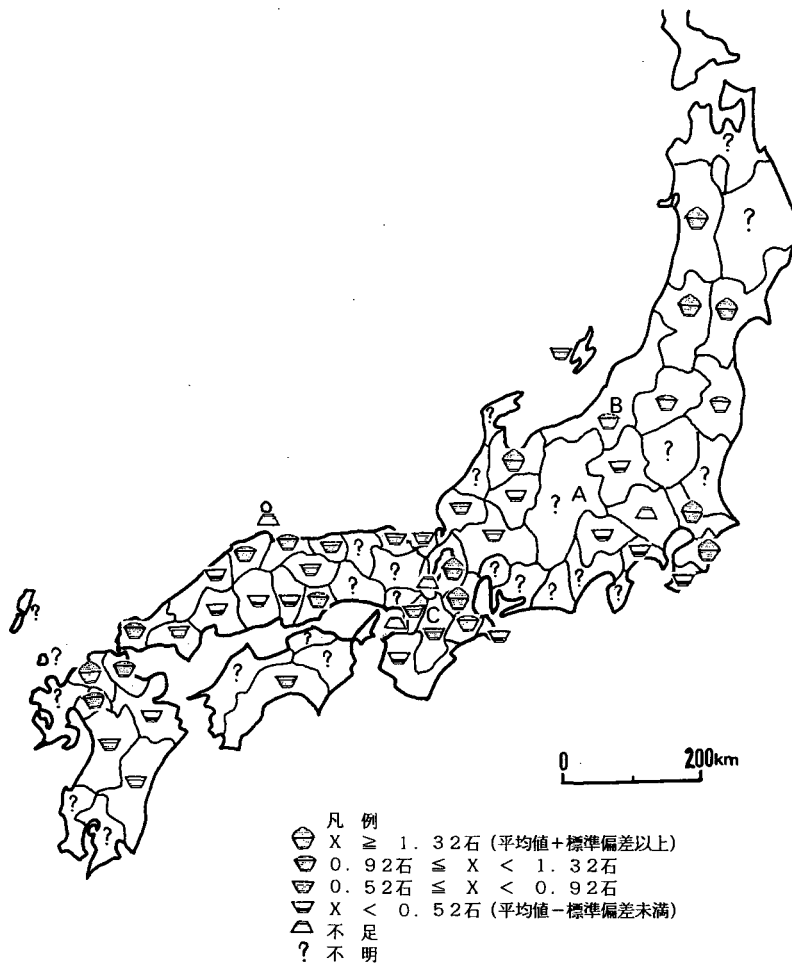


図1 1884年頃に農業就業者1人当り食べることができた米の推定量の国別分布

国数は48、平均値は0.92石、標準偏差は0.40である。
 【第1・2次農商務統計表】に記載された国別の米の生産量と人口から算出した。
 米の生産量は1883・84・85(明治16・17・18)年の国別生産量の3か年平均値、人口は明治17年の国別の総人口と農作人口である。
 1884年の非農作人口全員が1年間に1石の米を消費したと仮定して、その量を国別に総生産量から差し引き、残りの値を農作人口が食べることができた米の量とした。

業就業者の数と解釈した。1884年の農作人口は総人口の約61%で、農家人口とするには少なすぎるからである。それぞれの国で生産された米は、その国の中で消費されたという仮定に立て

ば、1884年頃の農業就業者1人当り食べることができた米の推定量になる²⁹⁾。さらに、近世後半の人口と米の生産量の関係は1884年頃と変わらないと筆者は考えているので、図1は近世後半

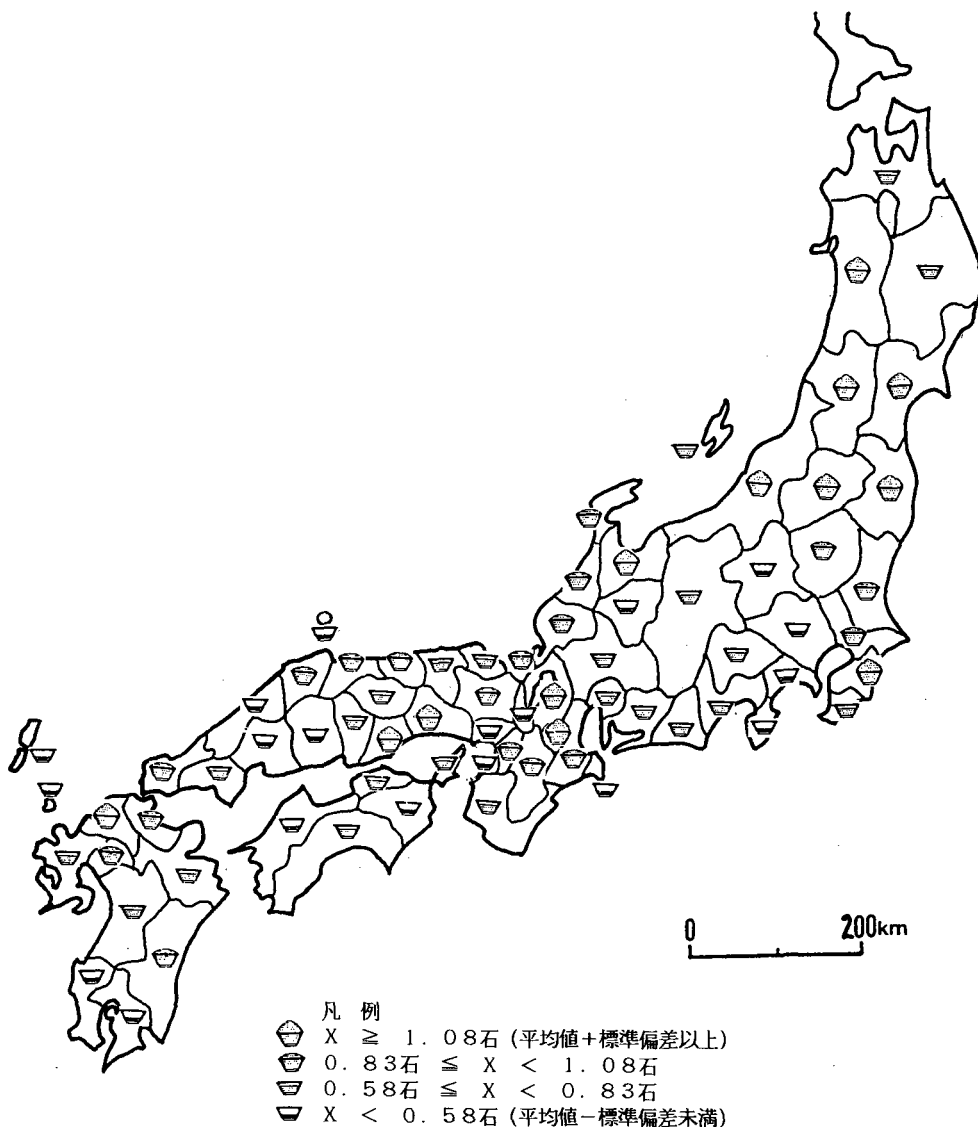


図2 1884年頃の1人当りの米の生産量の国別分布

国数は73, 平均値は0.83石, 標準偏差は0.25である。
 「第4回日本帝国統計年鑑」の国別人口と, 「第1・2次農商務統計表」の国別米の生産量から算出した。
 人口は1884(明治17)年の国別総人口, 米は1883・84・85(明治16・17・18)年の国別生産量の3年平均値である。米の生産量を総人口で除して, 国別に人口1人当たりの米の生産量を算出した。

の百姓1人当り食べることができた米の推定量の国別分布図としても使える。

この図と前章で取り上げた各地域の百姓の記録にある1年間の1人当たり米の消費量とを比

較して, 百姓の記録にある米の消費量が, その地域で普遍性を持つかどうかを検討する。計算の手順は, 次のとおりである。

「第1・2次農商務統計表」に農作人口が記

載されている国の数は48である。これら48国ごとに1883・84・85（明治16・17・18）年の米の生産量を合計した値を3で割って平均値を算出した。

1884年の国別人口のうち、非農作人口全員が1石の米を消費したと仮定して、その量を米の生産量から差し引き、残りをその国の農作人口が食べることができた米の量とした。

この米の量を1884年の農作人口で割ると、農作人口1人当たり食べることができた米の量が算出される。なお48か国の平均値は0.92石であり、これは米と雑穀半々の飯を日常食べることができ米の量である。また、平均値からの標準偏差は0.40である。農作人口が記載されている国の数が少ないことと、国ごとの値の分散が大きいため、標準偏差の値が大きくなっている。

以上の手順で国ごとに算出した値を、平均値と標準偏差を使って4段階に区分し、その記号を該当する国に表示して、図1を作成した。凡例の「不足」はその国の米の生産量が非農作人口の米の推定消費量よりも少ない国であり、「不明」は『第1・2次農商務統計表』に1884（明治17）年の農作人口の記載がない国である。

図1から、農業就業者1人当たり食べることができた米の推定量は、国ごとにかなり偏りがあったことが分かる。

図1に記入してある記号A・B・Cは、前章で取り上げた百姓の記録のうち、1年間の1人当たり米の消費量が分かる家の場所である。このうち、Bの越後国三島郡片貝村の太刀川家は1.3石であった。これは越後国の1.28石とほとんど同じである。またCの大和国山辺郡乙木村の山本家は1.53石であった。これは大和国の0.81石の倍近くの量になるが、大和国は南部に山村が多いためであり、北部の奈良盆地だけで計算すると、山本家の消費量に近づくと考えられる。ただし、『農商務統計表』は統計単位が国または府県であるために、実証はできない。

以上の検討から、地域差は大きいものの、近代初期の農業就業者はある程度米を食べていたことが推察できた。また、前章で示した各地域

の史料が記述する百姓の米の消費量は、近代初期の状況とあまり変わらないことが、ほぼ明らかになった。

なお、図1は近代初期の農業就業者1人当たり米の推定消費量が分からない国が多い。そこで間接的ではあるが、それを推測するために、1884（明治17）年頃の国別の1人当たり米の生産量を図2に表示した。生産された米がその国で消費されたと仮定すれば、図2は国別の1人当たり年間推定消費量になる。算出の手順は図の下欄に説明してある。生産量の階級区分は、全国平均値と標準偏差にもとづいておこなった。参考までに提示する。

VII. おわりに

本稿は近世後半における百姓の米の消費量を、史料によって実証を試みた結果の報告である。

まず、史料を支配する側と支配される百姓側に分けて、それぞれ紹介した。支配する側の史料からは「百姓は米を食べられなかった」との食生活像しか浮かんでこない。しかし、百姓の「本音」が記述されていると筆者が判断した史料を検討した結果、近世後半の百姓は、米と雑穀がほぼ半分づつ入った「かてめし」か粥か雑炊を、日常食べていたことが明らかになった。

次に、近代初期の農業就業者1人当たり食べることができた米の国別推定量と対比することによって、百姓側の記録が伝える食生活の実態は、その地域の姿を伝えていることが、ある程度証明できた。

以上の事から、本稿では、近世後半の百姓は米と雑穀がほぼ半分づつ入った「かてめし」か粥か雑炊を日常食べていたとの結論に至った。

それではなぜ「米の生産者である百姓は米を食べられなかった」という暗いイメージが現代の日本人に殖えつけられたのであろうか。それは、広く流布する情報は常に支配する側のものであること、支配される側は貢租の量に影響する実態を公的文書には正直に記述しないこと、そして近代以来の日本の歴史教育が、支配する側の「たてまえ」の歴史を伝えてきたからであ

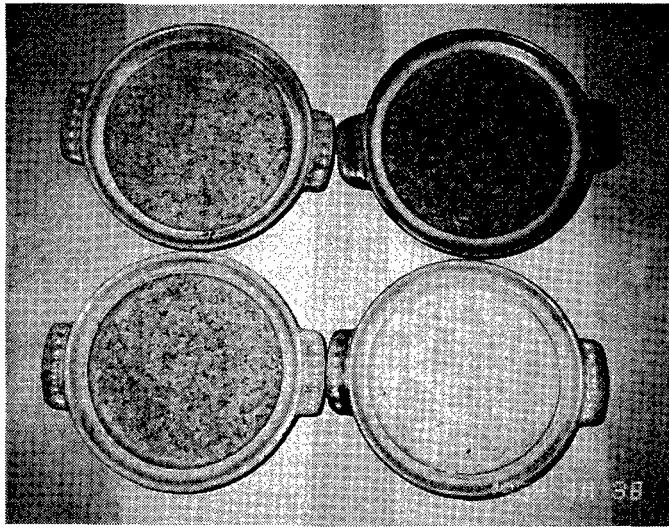


写真1 米と雑穀半々の飯と米だけの飯

左上は米とモチ黍，右上は米と五分搗の稗，左下は米と麦が，それぞれ半々づつ入った飯。右下は米だけの飯。米はいずれも精白米を使った。

近世の米の精搗率は農村が五分程度，都市が六～七分であったから，実際にはどの飯ももうすこし濃い色になるであろう。

ろう。

体制を維持する側が望む百姓の食生活像は，近世の早い時期に形成された。慶安2年の『触書』はその典型である。そして，後の人はそれを無批判に認容し，その目で百姓の食事を見るかぎり，実態は適切には記述されない。また，筆者は米と雑穀が半分づつ入った飯を炊いてみたことがあるが，ほとんど雑穀だけで炊いた飯のように見える(写真1)。都市で米だけの飯を食べている人が，たまに田舎に出かけて米と雑穀半々づつの飯を見ると，百姓はほとんど雑穀だけで炊いた飯を食べているように思えたであろう。支配する側の目には二重のフィルターが掛けられていたのである。繰り返しになるが，慶安2年の『触書』は「米を多く喰つふし候ハぬ様に可仕候」とは書いているが，決して「米を食べるな」とは書いていない。思い込みによる史料の誤読の例であろう。

近世後半の百姓は，間違いなく米を食べていたのである。ただし，米の消費量には地域差が見られた。今後は，村を統計単位とする近代初期の地誌類を使って，米の消費量の差異を復原

するとともに，それを産んだ地域固有の諸要因を明らかにすることが課題になる。本稿はその道を拓く第一報である。

(愛知大学文学部)

【文献と注】

- 1) 岡崎桂一郎(1913):『日本米食史』糧友会, 1368頁。
- 2) 永井威三郎(1966):『米の歴史』至文堂, 257頁。
- 3) 筑波常治(1969):『米食・肉食の文明』日本放送出版協会, 194頁。
- 4) 別枝篤彦(1976):米食の思想 地理21-9, 13-23頁。
- 5) 五十嵐富夫(1981):近世農村における年中行事と豪農の食生活—武藤家の「家訓実記」を中心に—, 群馬女子短期大学紀要8, 57-67頁。
- 6) 西川俊作(1982):移行期の長州における穀物消費と人民の常食, 三田商業研究25-4, 130-154頁。
- 7) 藤野淑子(1983):明治初期における山村の食事と栄養—「斐太後風土記」の分析を通じて—, 国立民族学博物館研究報告7-3, 632-651頁。

- 8) 板倉聖宣 (1986)：『歴史の見方考え方』仮説社，254頁。
- 9) 梅村又次ほか (1983)：『地域経済統計』（『長期経済統計』13）東洋経済新報社，389頁。
- 10) 石井良助編 (1959)：『徳川禁令考 前集第五』創文社，159-164頁。
- 11) 上野町教育会編 (1941)：『宗国史』上野町教育会，994頁。
- 12) 田中丘隅 (1721)：『民間省要』（瀧川誠一：『日本経済大典』第五卷，史誌出版社，1928，602頁）。
- 13) 著者未詳 (1805)：『粒々辛苦録』（土田隆夫翻刻，『日本農書全集』25，農山漁村文化協会，1980，3-148頁）。
- 14) 井口亦八 (1804-18)：『農家業状筆録』（徳永光俊翻刻，『日本農書全集』30，農山漁村文化協会，1982，227-306頁）。
- 15) 小貫萬右衛門 (1808)：『農家捷徑抄』（須永昭翻刻，『日本農書全集』22，農山漁村文化協会，1980，3-80頁）。
- 16) 安居院庄七 (年代未詳)：『報徳作大益細伝記』（足立洋一郎翻刻，『日本農書全集』63，農山漁村文化協会，1995，289-324頁）。
- 17) 高柳光寿ほか編 (1974)：『日本史辞典』角川書店，1208頁。
- 18) 当時の人口約2,900万人のうち，百姓以外の構成比は15～20%であったと考えられる。500万人は約17%である。
- 19) 柚木学 (1987)：『酒造りの歴史』雄山閣出版，363頁。
吉田元 (1993)：江戸時代の信州酒造業 (一) 酒史研究11，1-17頁，日本酒造史学会。
統計院 (1882)：『第一回日本帝国統計年鑑』204-206頁，(復刻版，東京プリント出版社，1962)。
- 20) 大畑才蔵 (1688-1704)：『地方の聞書』（安藤精一翻刻，『日本農書全集』28，農山漁村文化協会，1982，3-95頁）。
- 21) 『家法規矩覚書』は古川貞雄の著書に記載された表によった。古川貞雄 (1986)：『村の遊び日一休日と若者組の社会史一』平凡社，46-62頁。
- 22) 依田惣蔵 (1760)：『家訓全書』（大井隆男翻刻，『日本農書全集』24，農山漁村文化協会，1981，257-361頁）。
- 23) 丸屋甚七 (1764-72)：『家業考』（小都勇二翻刻，『日本農書全集』9，農山漁村文化協会，1978，3-171頁）。
- 24) 大関光弘 (1772)：『農業順次』（木塚久仁子翻刻，『日本農書全集』38，農山漁村文化協会，1995，47-88頁）。
- 25) 宮永正運 (1789)：『私家農業談』（広瀬久雄翻刻，『日本農書全集』6，農山漁村文化協会，1979，3-263頁）。
- 26) 太刀川喜右衛門 (1809)：『やせかまど』（松永靖夫翻刻，『日本農書全集』36，農山漁村文化協会，1994，149-345頁）。
- 27) 山本喜三郎 (1823)：『山本家百姓一切有近道』（徳永光俊翻刻，『日本農書全集』28，農山漁村文化協会，1982，121-285頁）。
- 28) 農商務省総務局報告課 (1886・87)：『第一・二次農商務統計表』（復刻版，慶応書房，1962）。
- 29) 下記の統計によると，1883～85 (明治16～18)年の米の総生産量の平均は約3,060万石，輸出量から輸入量を差し引いた輸出超過量の平均は約21万石で，0.7%にすぎない。
統計院・内閣統計局 (1885・86)：『第4・5回日本帝国統計年鑑』（復刻版，東京リプリント出版社，1963）。
- 他方，黒崎千晴と土肥鑑高が論じたように，国内の国ごとの米の流通はかなりあったと思われるが，米が流通する場所と消費地とは必ずしも一致しない。ここでは本文に記述した仮定を立て，農作人口が記載されている国について，試算をおこなった。筆者はこの仮定の妥当性の程度を，『滋賀県物産誌』など近代初期の村レベルの資料を使って検討する作業をおこなっているが，その結果については，別の機会で述べたい。
- 黒崎千晴 (1964)：東・西大商圏とその変貌一明治前期における米の流通を中心として一，歴史地理学紀要6，23-40頁。
- 土肥鑑高 (1969)：『近世米穀流通史の研究』隣人社，321頁。

[付記]

本稿は，歴史地理学会第38回 (平成7年) 大会と，関西農業史研究会178回例会において発表した内

容に、その後入手した史料と文献を加えて、まとめたものである。英文要旨は愛知大学文学部の Simon George Sanada 助教授に添削していただいた。発表

時と原稿作成の過程で貴重な指摘や労をとっていただいた諸氏に、心から感謝いたします。

THE RICE CONSUMPTION OF FARMERS IN THE LATTER HALF OF THE MODERN PERIOD IN JAPAN

Shoichiro ARIZONO

Many Japanese today have the impression that farmers during the Modern Period were not able to consume the rice produced through their own hard labour. In this paper the author examines the truth of this common idea.

The procedure for this study is as follows.

Firstly the author researches historical documents written from the viewpoint of the ruling classes, since the above-stated image derives from such documents. The author goes on to establish the per capita rice consumption of farmers with the help of historical materials such as farming literature, farm diaries and housekeeping manuals, which were written from the viewpoint of the subject farmers.

Historical documents written from the viewpoint of the ruling classes describe farmers in the Modern Period who were seldom able to eat rice. However, from statistics which record the population of Japan and the area of paddy in 1721, the per capita rice consumption of farmers at that time can be estimated to have been at least 72kg, which constituted roughly one half of the total grain consumption of ordinary Japanese. This level of rice consumption is almost equal to the per capita consumption of Japanese at the present day.

The author then researches documents which convey the true feelings of ordinary farmers, and examines the amounts of rice consumed, as well as the ratio of rice to other grain consumption, in several regions of Japan. Many of these documents were written from the eighteenth century to the first half of the nineteenth century, that is, during the latter half of the Modern Period in Japan.

Jikatano Kikigaki, written in the 1680s in Kii Province in western central Japan, tells us that farmers ate unmixed rice at every annual event.

Kagyo-ko, written in the 1760s in Aki Province in western Japan, describes an employer who fed his servants rice equally mixed with barley every day.

Shika-nogyodan, written in 1789 in Echu Province in northern central Japan, records that farmers mixed a little broken rice or Indica type rice in with their rice for ordinary meals.

Yase-kamado, written in 1809 in Echigo Province in northern central Japan, describes the annual rice consumption of a household. From this it can be estimated that the annual per capita rice consumption of a member of a farming household was about 195kg.

Farming Diary of the Yamamotos, written in 1823 in Yamato Province in western central Japan, documents that the annual rice consumption of each family member was 210kg, and that

the ratio of mixing rice and barley was calculated at roughly 6 : 4.

From the above the author concludes that, even allowing for some regional variation, farmers in the latter half of the Modern Period in Japan generally ate rice mixed in equal proportions with other grains every day.